【334】

氏　名（本籍）	浜名恵美（はまなえみ）（東　京　都）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博　乙　第　1891　号
学位授与年月日	平成15年1月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	シェークスピアとジェンダー －驚異と領有：ジェンダーの驚き－

主　査	筑波大学教授	博士（文学）	荒　木　正　純
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	阿　部　軍　治
副　査	筑波大学教授		井　上　修　一
副　査	筑波大学教授		大　熊　　榮
副　査	筑波大学講師		吉　原　ゆかり

論文の内容の要旨

本論文は，近代初期イングランドの文化とシェイクスピアのテクストに見いだせるジェンダーの作用を解明したものである。本論文の副題が示唆しているように，本論文は，スティーヴン・グリーンブラットの『驚異と占有：新世界の驚き』で提示された「驚異なるもの」と「驚き」の理論を，ジェンダー研究のために領有し，「ジェンダー」は「驚き」として作用するとする仮説を提唱・論証したものである。論文の構成は，以下のとおり。

序章
第1部　理論
　第1章　ジェンダー研究概観
　第2章　シェイクスピア研究とジェンダー
　第3章　ジェンダー研究とアプロプリエーションの意義
　第4章　ジェンダーの驚き
第2部　インターフェイス
第3部　シェイクスピアの詩と演劇のテクスト分析
　第1章　ダーク・レイディとセクシュアリティの驚き
　第2章　ロザリンドと異性装の驚き
　第3章　オフィーリアと女性的身体の驚き
　第4章　クレオパトラとジェンダーの驚き
結章
付録＆参考文献

第1部では，ジェンダー研究と驚異研究を接合し，そこから仮説を提唱し，第2部と第3部でその検証をする形態をとっている。

第１部第１章では，ジェンダー研究が概観され，規定ではなく作用を考察する構築主義の立場をとるとの著者の姿勢が表明され，第２章では，シェイクスピア演劇がジェンダーの演劇性に立脚したことを改めて確認し，それがいかに今日的な意味をもつかが論じられている。第３章では，本論文の実践的戦略となる「領有」（アプロプリエーション）の意義を説明したあと，いかにシェイクスピアのテクストが現代の関心と深い関連性をもっているかを示している。第４章では，驚異研究が概観されたあと，初期近代イングランドとシェイクスピアのテクストに見られる主に女性性に関する言説が，矛盾と多様性を特徴としていることが示され，この状況理解に驚異なるものの象徴体系が有益な枠組みとなり，「ジェンダーが驚きとして当時作用していた」という仮説が提唱される。

第２部は，第１部の理論編と第３部のテクスト分析の実践をつなぐインターフェイスとなっていて，処女女王エリザベス表象，とりわけローリーの『ギアナの発見』における植民地言説で，「ジェンダーの驚き」がいかに作用していたかが検証されている。

第３部第１章では，「ダーク・レイディ・ソネット集」が用いられ，ジェンダーの対概念である性的欲望について分析され，「性交は驚き」であると論じられている。第２章では，異性装をふんだんに駆使している喜劇『お気に召すまま』がとりあげられ，誤認と真実の暴露，差異と同一性の交換と融合を筋とする状況では，ジェンダーが驚きとしてきわめて効果的に作用することが指摘されている。第３章では『ハムレット』の登場人物で狂気に陥ったオフィーリアの身体が考察の対象とされ，彼女の女性的自体が「身体化された精神」という驚きを表象し，多様で矛盾した衝動と現実の全体性を構築するイリュージョンをもたらす「驚きの身体」であるとしている。さらに，第４章では，『アントニーとクレオパトラ』がとりあげられ，クレオパトラは，西欧が自己を確立するために必要とした，ジェンダーと人種の両方の軸での他者であり，「オリエントの女性化」が見られると指摘し，このようにジェンダー構築に深層で関与している幻想は，驚きであると論じている。

結論では，第１部から第３部までの議論の総括をし，現在でも執拗に存続しつづけているジェンダー・バイアスを是正するために，初期近代のシェイクスピアのテキストは有効なテキストでありつづけると予測している。それは，ジェンダー研究では従来分析枠として考慮されることのなかった，驚異とジェンダーが接木されているからとしている。

審査の結果の要旨

本論文は，標題が示しているとおりに，まずはシェイクスピア研究の一環であることを確認しておかなくてはならない。シェイクスピア研究を介して，今日のジェンダー・バイアスを是正するための装置を仮説的に提起し，なおかつその仮説的装置を用いてシェイクスピアのテクストを分析・解釈するという試みである。その仮説とは，従来，フェミニズム研究やジェンダー研究が，決して発想することのなかった＜驚異＞論の思考枠をアプロプリエイト（領有）することである。つまり，この企ては，「ジェンダーは驚異として作用する」という仮説的命題に集約することができる。

ジェンダーは，一般に，男女間に存在している文化的・社会的・歴史的に構築されものという認識がすでにあり，「男らしさ」や「女らしさ」の規範や，時代と文化の展開に対応して変化しているとされる。そうしたジェンダーが，意識的であれ無意識的であれ，固定的な決めつけや偏見として作用する場合，それが「ジェンダー・バイアス」と呼ばれている。ジェンダー研究の目的は，第一にジェンダーそのものの理解の深化にあり，第二に，その深化に基づき現代のジェンダー・バイアスを是正し，ジェンダーにかかわって起こる不当な差別や排除を正す運動を展開することにある。本論文は，こうした認識に立ち，ジェンダーの規定の問題を扱うのではなく，ジェンダーが現実にどのように作用しているか，もしくは作用していたかという実際的な問題に関与している。この問題意識から，エリザベス朝期のシェイクスピアのテクストを通じて，ジェンダー作用を考察してみると，ジェンダーが＜驚異＞として作用していたことに気づかされた。この認識を一つの仮説として提起し，それが正当な

裏づけに基づくものであることを論証しようとした。

本論文は，シェイクスピア研究の分野で，別個に展開されてきたジェンダー研究と驚異研究とを接木するところに斬新な学的貢献がある。本論文は，いかにその接木が妥当なものかをジェンダー研究と驚異研究の概念を通じて行い，過剰ともいえるほどの理論武装をした。その過程で提示されたそれぞれの研究領域の膨大な資料の分析・整理は，従来の錯綜した研究の様相にひとつのまとまった概観を提供することになり，学問的貢献が大であるといえる。また，その理論枠で分析されたシェイクスピアのテクスト分析も，新たな理論枠によって捉えなおされ，斬新な解釈が提示できている。この点でも，本論文の学問的貢献は大きい。

しかし，こうした学的貢献度の高い本論文にも，不満がないわけではない。その第一は，ジェンダーが驚異として作用したとする仮説が，ある意味で恣意的なテクストの分析に委ねられてしまい，エリザベス朝当時のその他のテクストによる補強作業がおこなわれなかったことである。そのため，現在の本論文の読者が，ジェンダーが驚異であったという主張になかなか同意できないところがある。本論文が主張するように，ジェンダー・バイアスは，文化的・社会的・歴史的構築物であるとするなら，現代の読者がもつジェンダー・バイアスから当時のジェンダー・バイアスがなかなか実感されないからであろう。したがって，著者のもつジェンダー・バイアスと一般読者のそれとの溝を埋める作業があれば，もっと本論の主張が説得力をもったと思われる。第二に，第1部も第3部もそれぞれは十分に論じられてはいるが，第2部のインターフェイスの存在にもかかわらず，論全体が融合しているとはいえない印象を受ける。

こうした欠点はあるものの，本論文がジェンダー研究にも，またシェイクスピア研究，ひいてはイギリス・ルネサンス研究に新たな知見を加え，大いなる貢献をしたことにかわりはない。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。